

# 「妙円寺詣り」研究

山田理恵<sup>1)</sup>, 森 克己<sup>1)</sup>, 鶴木親志<sup>1)</sup>, 浜田幸史<sup>1)</sup>,  
下大迫 晃<sup>2)</sup>, 塩川勝行<sup>1)</sup>, 国重 徹<sup>1)</sup>, 藤谷雄平<sup>3)</sup>

## A Study of *Myôenji Mairi*

Rie YAMADA<sup>1)</sup>, Katsumi MORI<sup>1)</sup>, Chikashi UNOKI<sup>1)</sup>, Koji HAMADA<sup>1)</sup>,  
Akira SHIMOOSAKO<sup>2)</sup>, Katsuyuki SHIOKAWA<sup>1)</sup>, Toru KUNISHIGE<sup>1)</sup>, Yuhei FUJITANI<sup>3)</sup>

### Abstract :

*Myôenji mairi*, which literally means “Myôenji temple visit,” together with *Sogadon no kasayaki*, which means “Soga brother’s burning umbrellas,” and *Akô gishinden rindokukai*, meaning “the reading circle of the biography of loyal Akô retainers,” is regarded as one of the three major traditional events in Kagoshima Prefecture.

*Myôenji mairi* originated from a historical fact about retainers in Kagoshima, the town of Kagoshima Castle. Clad in armor from head to toe, they walked through the night (a round trip of 40 km) to visit the Myôenji Temple, Yoshihiro Shimazu’s family temple, on September 14 (old calendar), the night before the Battle of Sekigahara. With their procession and visit to the temple, the retainers recalled the hardships endured by Yoshihiro Shimazu (17th head of the Shimazu clan, 1535–1619) and his soldiers, who were defeated at the Battle of Sekigahara but broke through the Tokugawa army, withdrew from the battlefield, and arrived back at Kagoshima after great sacrifice. This event seems to have had the aspect of training both the retainers’ body and mind. *Myôenji mairi* and *Myôenji mairi*-related events are held annually on the fourth Saturday and Sunday of October, close to September 14 by the old calendar. On the Sunday, a walking event is held as part of the *Myôenji mairi* festival.

The contemporary *Myôenji mairi* is a noteworthy case where an event that originated in the traditional sport culture of a region contributes to that region’s revitalization. This study focuses on *Myôenji mairi* and related events and examines their significance and issues in the regional community. The sources used in this study are based on fieldwork, material collection, participant observation at *Myôenji mairi* and related events, data gained from the results of a questionnaire survey to and interviews with people involved in these events such as the organizers and the participants, and some of the authors’ experiences.

**Keywords:** Satsuma han, *gojû kyôiku*, gakusha, samurai procession, *budô* tournament, walking event

### I はじめに

今日、「妙円寺詣り」は、「曾我どんの傘焼き」  
「赤穂義臣伝輪読会」とともに、鹿児島県の伝統的  
な三大行事に位置づけられている<sup>注1)</sup>。

その「妙円寺詣り」とは、関ヶ原の戦いに敗れ、  
多くの犠牲を払いながらも徳川軍勢を突破し戦場

を脱出、鹿児島に帰着した島津義弘（島津家17代、  
1535<天文4>–1619<元和5>年）とその軍勢  
の苦難をしのび、関ヶ原の戦い前夜の旧暦9月14  
日、鹿児島城下の藩士たちが甲冑を着用して夜を  
徹して歩き、義弘の菩提寺である妙円寺に参拝し  
た（往復40km）ことに由来するとされ、心身の

<sup>1)</sup> 鹿屋体育大学

<sup>2)</sup> 鹿児島県立鶴翔高等学校

<sup>3)</sup> 鹿屋体育大学大学院博士後期課程

鍛練も兼ねていたとみられている。

『鹿児島県の祭り・行事：かごしまの祭り・行事調査事業報告書』（鹿児島県教育庁文化財課編, 2018）（以下、『調査事業報告書』）とする。）では、「妙円寺詣り」は、「[別名] 妙円寺詣りフェスタ」で、「現在は、日置市・商工会・観光協会等主催の『妙円寺詣り』及び『妙円寺詣りフェスタ』と名付けられて、武者行列参拝、郷土芸能奉納、相撲・武道大会、ウォークラリー等の『妙円寺詣り奉納行事』が行われている。」（以上, p. 235）と解説されている。このように、1993（平成5）年からは、「妙円寺詣り」および「妙円寺詣り行事大会」（主催：日置市、日置市教育委員会、日置市体育協会、伊集院地域体育協会、日置市商工会、日置市観光協会）が、毎年旧暦9月14日に近い10月の第4土・日曜日に開催されている（日置市, online 1）。同行事大会では、武者行列や郷土芸能の奉納、武道・スポーツの大会、書道・生け花の展示や呈茶などが行われる。

また、同第4日曜日に開催される「妙円寺詣りふえすたウォークラリー」（主催：日置市観光協会）（以下、「ウォークラリー」とする。）は、2019年で29回を数える。参加者は、照國神社から徳重神社までの20kmのコース（ハーフは、チェスト館から出発）を完歩する。前出の『調査事業報告書』によると、「昼間のウォークラリーが現在の妙円寺詣りのメインとなっている」（p. 238）とされる。

また、同報告書では、「妙円寺詣り」の意義について、「かつては、主君に対しての忠義従心を鼓舞するための『往復四〇キロメートルの行軍』であったかもしれないが、その行軍を、『山坂達者』というスローガンに変えて『青少年の足腰の鍛錬』という意義づけをして『妙円寺詣り』を再興している。そこには尚武を貴ぶ薩摩の独特の歴史観が窺えるのである。行事の価値観は、時代とともに変遷していくのであろうが、妙円寺詣りは、地域の持つ独特の価値観をうまく取り込んで意義付け、今日も隆盛をみている好事例であろう。」（p. 238）と述べられている。

スポーツ行事という観点からは、長岡ら（2003）が、鹿児島県内の生涯スポーツ関係事業の現状と課題を考察したなかで、「各市町村で行われているユニークな行事」を分類し、「ウォーキング系」のなかに「妙円寺詣り行事大会」を挙げている（長岡ら, 2003, p. 118）。そして、「各地域にユニークな行事が沢山あり、地域の活性化にかなり貢献していると思われるが、これからいかに県外からも人を集めることができるかについて産官学共同で考えていく必要がある。」（長岡ら, 2003, p. 122）と考察している。このような視座からも、今日の「妙円寺詣り」は、地域の伝統的運動文化に由来する行事が地域の活性化に寄与している事例として注目される。しかしながら、スポーツ文化人類学的アプローチから、その意義と課題について考察したものは未見である。

また、伝統的運動文化と地域開発については、伝統打球戯や伝統綱引きに着目した山田（2015, 2017）の、スポーツ文化人類学的、歴史学的立場からの研究が挙げられる。さらに、山田（2017）は、スポーツの文化人類学的、歴史学的アプローチから伝統的運動文化と地域開発について考察した研究成果の充実と蓄積、という課題についても言及している。

そこで、そのような課題に応え新知見をもたらすものと位置づけられる研究の一環として、本研究では、「妙円寺詣り」に着目し、その実態を明らかにすることを通して、地域社会における現代的意義と課題について考察することを目的とした。本研究で用いた資料は、「妙円寺詣り」で自由に歩く参加者および「ウォークラリー」参加者、「妙円寺詣り行事大会」の武者行列（鹿児島市学舎連合会）、武道大会について、現地調査および資料収集、参与観察、主催者・参加者ら関係者へのインタビュー・アンケート調査を実施した結果得られたもの、および筆者らによる体験録である（資料収集・調査期間：2017<平成29>年1月—2020<令和2>年3月）。

## Ⅱ 「妙円寺詣り」および関連行事の実態と体験記

### 1. 「妙円寺詣り」および関連行事の概要

「妙円寺詣り」で自由に歩く参加者は、鹿児島市内から約20kmの道のりを、それぞれのペースで歩いて、徳重神社（日置市、妙円寺跡に建立）、妙円寺（廃仏毀釈により焼失したが、1880<明治13>年、現在の地<徳重神社の西>に復興）に参拝する。参加者の多くは、島津斉彬を祀る照國神社（鹿児島市）から出発する。

「ウォークリー」では、照國神社で参加申込みをし、出陣式の後、徳重神社をめざして出発する。日置市商工会青年部を中心とする多くのボランティア・スタッフの協力のもとに運営されている。途中、約5km毎に関所が設けられ、通行手形への押印がなされる。また、お茶や飴などの接待も有り、参加者は小休憩できる。徳重神社横の第4関所では、完歩証に「敵中突破」のスタンプが押印され、缶バッジが授与される。

なお、この「妙円寺詣り行事大会」の趣旨としては、「郷土の誇る歴史的伝統美風の伝承を図るとともに、スポーツを通して県民（市民）の健康、体力づくりに貢献し、ぬくもりと活力に満ちたまちづくりの輪を広げる」（日置市、online 2, p. 2）ことが挙げられている。

### 2. 「妙円寺詣り」の思い出

#### 1) 「妙円寺詣り」体験

筆者Aの「妙円寺詣り」の体験は、小学校5年生に始まる<sup>注2)</sup>。筆者Aの通った小学校では、毎年10月開催の「妙円寺詣り」を5・6年生が参加する学校行事として位置付け、2学年全員が学校から20km離れた伊集院の徳重神社（島津義弘公を奉祀する）まで徒歩で参詣していたからである。当時、「妙円寺詣り」の謂われについては知る由もなかったが、高学年になるとこの行事に否応なく参加しなければならないことは覚悟していた。

また、学校に隣接して、現代の青少年に対して

伝統的な郷中教育を行う「自彊学舎」では、鍛錬を目的に舎生たちに甲冑を着けさせて、往復を歩かせていたことも目にしており、舎に通う同級生からも参加を誘われることがあった。これらのことがあって、三人行事の「妙円寺詣り」は、いつしか自分の心に大きくしみ込んできたのではないかと考えている。

初めて参加した5年生の時は、昼食のおにぎりを風呂敷に包んでタスキに結わえ、水筒を肩にして、22番まである「妙円寺詣りの歌」を歌いながら急坂の水上坂を上り、横井を経由しておおよそ5時間をかけて徳重神社を目指した。関ヶ原からの退却時の難儀に比べると遠く及ばないながらも、初めて20kmを歩き通して徳重神社に着いた時には、両足の親指の爪の中には血豆ができていた。この爪は、しばらくして剥がれた記憶がある。

その後、学生時代はほとんど参加することはなかったが、十数年後に再び参加しようという意識が芽生えてきた。離島や大隅半島に勤務していた時期は地理的条件で参加できなかったが、それ以外はほぼ毎年参加するよう努めていた。縁あって伊集院に居を構えてからは、これまで以上にこの行事を身近なものとして意識するようになった。現在は、日置市の一市民として、「妙円寺詣り」への参加を自身の年に一度の欠かせない行事としている。

2017年は、台風の影響を考え、第4土曜日に、始発のJRで鹿児島中央駅へと向かい、同駅から歩き始めた。スタート直後の常盤トンネルから武岡台小学校の前までは厳しい上りの連続で、汗を拭きながら上りきるのに50分かかるが、文献（三木、1986；西田、1972）で読んだ、関ヶ原からの退路を想像しながら歩くうちに、『このくらいの上りでへこたれるな』と、先人から励ましの声をもらったように感じた。

10時頃に徳重神社に到着し、参詣を済ませたのち、境内に設置された大型テント内で小休止をしている人たちに調査の趣旨を説明し、アンケート調査をお願いしたところ、承諾を得られた133名

(家族による回答も含む)からご回答いただいた。

徳重神社のある日置市においては、数か月前から市役所および市の商工会をあげて準備が行われる。鹿児島市から伊集院への幹線道路となる県道横井線は、「歩きたくなる街道」としてこれまで整備が進められてきた。「妙円寺詣り」の時期が近付くと、この道路の歩道には東西両軍武将の幟旗が翻り、「妙円寺詣り」当日になると、早朝から夕暮れまで人の流れが途切れることなく続く。今日、「妙円寺詣り」は、市最大のイベントとなっている。今後も、妙円寺詣りが地域に定着した一大イベントとして継承されていくことが期待される。

なお、前述のアンケート調査の結果については、次章において分析することとする。

## 2) 「妙円寺詣り」への参画（小学生期の体験記）

以下は、筆者Bの小学校時代の体験記である。

昭和58年度に転入した鹿児島市立H小学校では、地域行事あるいは学校行事の一環として、妙円寺詣りを実施していた。筆者Bは、小学3年生時より毎年4回参加した。小学3、4年生時は、当時盛んであった地域子供会（通称あいご会）の行事に参画する形で参加した。3年生時は、小学校から徳重神社まで約20Kmの道程を歩いていき、お詣りをしてから、当時の国鉄鹿児島本線で伊集院駅から西鹿児島駅（当時）まで移動し、駅から自宅まで歩いて帰った。4年生時は、逆のルートで移動し、徳重神社にお詣りしてから、自宅まで歩いて帰った。

当時、学校では山坂達者運動といって、始業前にグラウンドを走ったり、既存の固定遊具や古電柱や古タイヤを再利用した固定遊具を周回したりする取組等の体力づくりが盛んに行われた時期で、地域子供会では日曜日早朝の「歩こう会」等を常時活動として行っていた。筆者Bは、当時の国鉄官舎に居住していたため、同地区の地域子供会の小学生は100名を超える状況で、行事に参画する人がその一部であったとしても、大勢いたことを記憶している。

3・4年生時は、地域子供会の世話役であろう複数の保護者等の先導のもと、地域子供会名が書かれた幟旗を持ちたくて、友達と交代で持った思い出がある。母、同級生とその家族、近所の方など顔見知りが多く、広がって歩かないようにと注意を受けながら歩いたものである。持参する飲食物は、妙円寺詣りの趣旨に応じて粗食と限定され、各自、おにぎり1、2個と漬物、水筒（中身は麦茶）で、道中の広場等の休憩所で飲食した。小学校3年生時には、この行事に感銘を受け、妙円寺詣りや島津家のことを調べ、作文を書いた。

5・6年生時は、学校行事の一環として、学級毎に学校から徳重神社まで歩いていき、お詣り後に神社境内で、各自準備した粗食（おにぎり1、2個と漬物等）を摂り、休憩時間に遊び、バスで学校まで帰った。6年生時には、母が保護者ボランティアで同行し、気恥ずかしかった。前を歩く人と距離が開くと「チェストーツ」と言って小走りした。

5・6年生時の担任は伊集院在住の50代後半で、妙円寺詣りの趣旨等にとっても詳しく、行事前と道中、いろいろな話をしてくださった。特に覚えているのが、関ヶ原合戦時の島津義弘公とその部下たちのとった言動や「妙円寺詣りの歌」の解説である。「妙円寺詣りの歌」を全て歌えて解説できるのをすごいことだと、子供心に思った。他の小中学生も同様の行事を行っていた。近隣の当時男子校であった私立高校の生徒は、学校から徳重神社まで走って往復し、教員らしき方がチェックポイントで生徒に声をかけていた。また、道中、老若男女問わず大勢の参加者がおり、所々にある蕎麦屋や商店等が賑わっていた。

以上のように、妙円寺詣りへの参画は、遠足に参加するような楽しみであり、約20kmを踏破することによって達成感も得られるものであった。また、島津義弘公のことを知り、薩摩隼人とはかくあるべしという教えを得る鹿児島の教育的風土は、少なからず自身の人格形成に影響を与え、また子育ての指針ともなったといえる。このような

体験から、妙円寺詣りが、鹿児島県の教育的風土を形成する重要なものとして、今後も郷中教育の教えとともに継承されていくことを望む。

本節では、2017年10月21日（土）の妙円寺詣りでの学舎連合会による「武者行列」に参加した方へのアンケート調査結果を分析した。学舎連合会による武者行列には、会文舎、二松学舎、自強学舎、共研舎、四方学舎、集成学舎、共立学舎の7つの学舎が参加した。各学舎からの参加者69名の回答を得た<sup>注3)</sup>。表1は、それらの結果をまとめ

### Ⅲ アンケート・インタビュー調査結果から

#### 1. 学舎連合会の武者行列参加者へのアンケート調査結果

表1 妙円寺詣り参加者へのアンケート調査結果

項目	武者行列参加者	ウォークリー参加者	自由参加者
属性：性別	・女性：20.3% ・男性：79.7%	・女性：40.4% ・男性：59.6%	・女性：57.7% ・男性：42.3%
：年齢	・10歳未満：0.0% ・10歳代：1.5% ・20歳代：4.4% ・30歳代：13.2% ・40歳代：25.0% ・50歳代：13.2% ・60歳代：23.5% ・70歳代：11.8% ・80歳代以上：7.4%	・10歳未満：1.1% ・10歳代：12.0% ・20歳代：3.3% ・30歳代：5.4% ・40歳代：18.5% ・50歳代：17.4% ・60歳代：31.5% ・70歳代：8.7% ・80歳代以上：2.2%	・10歳未満：5.4% ・10歳代：19.2% ・20歳代：4.6% ・30歳代：16.9% ・40歳代：9.2% ・50歳代：4.6% ・60歳代：21.5% ・70歳代：17.7% ・80歳代以上：0.8%
：住所	・鹿児島市：83.6% ・日置市：3.0% ・鹿児島県内（上記2市を除く）：9.0% ・県外：3.0% ・外国人：1.5%	・鹿児島市：50.6% ・日置市：41.4% ・鹿児島県内（上記2市を除く）：4.6% ・県外：3.4%	・鹿児島市：44.4% ・日置市：44.4% ・鹿児島県内（上記2市を除く）：8.1% ・県外：3.2%
妙円寺詣りを 知った理由 (複数回答)	(質問項目無し)	・「新聞」：7.6% ・「チラシやポスター」：7.6% ・「自治体のホームページ」：9.8% ・「知り合い等の紹介」：15.2% ・「定例行事だから知っていた」：56.5% ・「その他」：3.3%	・「新聞」：5.5% ・「チラシやポスター」：9.0% ・「自治体のホームページ」：2.1% ・「知り合い等の紹介」：3.4% ・「定例行事だから知っていた」：68.3% ・「その他」：11.7%
参加の動機	・「鹿児島の伝統行事を継承するため」：55.2% ・「仲間、家族や友人にすすめられたから」：34.3% ・「その他」：10.4%	・「鹿児島の伝統行事を体験するため」：31.3% ・「健康のため」：32.1% ・「家族や友達にすすめられたから」：2.7% ・「ほぼ毎年参加しているから」：26.8% ・「その他」：7.1%	・「鹿児島の伝統行事を体験するため」：25.7% ・「健康のため」：11.5% ・「家族や友達にすすめられたから」：6.8% ・「ほぼ毎年参加しているから」：36.5% ・「その他」：16.2%
妙円寺詣りへの 参加	武者行列への参加		
	・「今回が初めて」：21.4% ・「2～5回」：25.7% ・「6～10回」：5.7% ・「11回以上」：8.6% ・「ほぼ毎年」：38.2% ・「不明」：1.4%	(質問項目無し)	(質問項目無し)
「妙円寺詣り以外の 鹿児島三大行事」への 参加の有無	「妙円寺詣り」行事への参加（武者行列以外）		
	・「参加したことが無い」：68.2% ・「今年が初めて参加」：3.0% ・「1回」：4.5% ・「2～5回」：12.1% ・「6～10回」：0.0% ・「11回以上」：9.1% ・「不明」：4.5%	・「今回が初めて」：22.8% ・「2～5回」：28.3% ・「6～10回」：21.7% ・「11回以上」：3.2% ・「ほぼ毎年」：23.9%	・「今回が初めて」：28.5% ・「2～5回」：21.5% ・「6～10回」：12.3% ・「11回以上」：8.5% ・「ほぼ毎年」：28.5%
「妙円寺詣り の由来」への 理解	・「理解している」：59.4% ・「やや理解している」：33.3% ・「どちらでもない」：4.3% ・「理解していない」：2.9%	・「理解している」：42.4% ・「やや理解している」：45.7% ・「どちらでもない」：7.7% ・「理解していない」：3.3%	・「理解している」：36.2% ・「やや理解している」：40.8% ・「どちらでもない」：16.8% ・「理解していない」：6.2%
妙円寺詣り以外の 鹿児島三大行事」への 参加の有無	「曾我どんの傘焼き」		
	・「ほぼ毎年参加している」：16.1% ・「一度だけ参加したことがある」：19.6% ・「一度も参加したことがない」：60.7% ・「そのような行事の存在を知らなかった」：3.6%	・「ほぼ毎年参加している」：5.9% ・「一度だけ参加したことがある」：11.8% ・「一度も参加したことがない」：68.2% ・「そのような行事の存在を知らなかった」：14.1%	・「ほぼ毎年参加している」：3.2% ・「一度だけ参加したことがある」：10.9% ・「一度も参加したことがない」：62.1% ・「そのような行事の存在を知らなかった」：25.8%
「妙円寺詣り」に 参加した感想	「赤穂義臣伝輪読会」		
	・「ほぼ毎年参加している」：33.3% ・「一度だけ参加したことがある」：7.9% ・「一度も参加したことがない」：52.4% ・「そのような行事の存在を知らなかった」：6.3%	・「ほぼ毎年参加している」：4.7% ・「一度だけ参加したことがある」：10.6% ・「一度も参加したことがない」：63.5% ・「そのような行事の存在を知らなかった」：21.2%	・「ほぼ毎年参加している」：0.8% ・「一度だけ参加したことがある」：5.0% ・「一度も参加したことがない」：55.4% ・「そのような行事の存在を知らなかった」：38.0%
「妙円寺詣り」に 参加した感想	自由記述による回答		
	・「義弘公のことを思いすごさを感じる」 ・「薩摩人としての誇り」 ・「学舎の精神を次世代に伝えること」	・「島津義弘公のことを健康づくりにも役立っています」 ・「関ヶ原の戦いに思いを、義弘公の敵中突破に学びたい」 ・「途中のおもてなしが良かった」 ・「おもてなしが多く鹿児島人の良さ、土地の良さを改めて感じることができた」 ・「来年も参加したい」	・「義弘公の遺徳を感じる」 ・「関ヶ原の戦いの歴史を学ぶいい機会」 ・「鹿児島の伝統行事に参加することに意義がある」 ・「健康維持」 ・「体力づくり」 ・「武者行列が素晴らしい」 ・「来年もまた来たい」

たものである。なお、本稿では、自由記述については、主な回答を取り上げることとする。

### 1) 参加者の属性

武者行列参加者の回答者の性別は、「女性」(20.3%)、「男性」(79.7%)と、回答者全体の8割を男性が占めていた。また、年齢は、「40歳代」が25.0%と最も多く、次が「60歳代」(23.5%)であった。全体的にみると、50歳代以上の割合が過半数(55.9%)を占めている。また、回答者の住所で最も多いのが鹿児島市(83.6%)で、日置市は3.0%、それ以外の県内は9.0%、県外は3.0%、外国からの参加者も1名(1.5%)いた。

イベント参加の動機では、「鹿児島の伝統行事を継承するため」が過半数(55.2%)を占め、次が「仲間、家族や友人に勧められたから」(34.3%)であった。職業・所属は、社会人が大半を占め(69.1%)、次いで「無職」(20.6%)で、「大学生」(8.8%)、小学生(1.5%)であった。

### 2) 妙円寺詣りへの参加について

「武者行列」に参加した回数については、「ほぼ毎年」が最も多く(38.2%)、次が「2~5回」(25.4%)であった。その一方で「今回が初めて」と回答した回答者も全体の5分の1強(21.1%)を占めていた。また、「武者行列」以外の妙円寺詣りの行事に参加した経験は、「参加したことが無い」が最も多く(68.2%)、次が「2~5回」(12.1%)であった。このことは、武者行列参加の回答者にとって、武者行列に参加することは「妙円寺詣りへの参加」とイコールであることを意味している。さらに、妙円寺詣りの由来を問う質問では、「理解している」(59.4%)、「やや理解している」(33.3%)、と回答者の大半(92.7%)が理解していた。「理解している」と回答した人の割合は、ウォークリー参加者(次節において詳述)と比べて17%も高く、「理解していない」とする回答はごく少数(2.9%)にとどまった。このような学舎連合会の方々の理解度は、筆者らの

推察通りの結果であった。

また、妙円寺詣り以外の「鹿児島三大行事」への参加の有無について尋ねたところ、まず、「曾我どんの傘焼き」については、「一度も参加したことがない」とする回答が最も多く(60.7%)、以下「一度だけ参加したことがある」(19.6%)、「ほぼ毎年参加している」(16.1%)であった。経験無しの割合は、ウォークリー参加者の回答とほぼ同じであったが、「一度だけ」と「ほぼ毎年」の回答を合わせた「経験あり」とした割合は、ウォークリー参加者と比べ18.3%も高かった。次に、「赤穂義臣伝輪読会」については、「一度も参加したことがない」とする回答が最も多かった(52.4%)が、ウォークリー参加者と比べ、その割合が11.1%低かった。また、「ほぼ毎年参加している」とする回答が二番目に多く33.3%と、回答者の3分の1を占めていることが特徴となっている。「そのような行事の存在を知らなかった」とする回答も6.3%とごく少数にとどまった。これらの回答結果より、鹿児島市学舎連合会の武者行列参加者は、ウォークリー参加者と比べ、「鹿児島三大行事」の他の行事にも「ほぼ毎年参加している」「一度だけ参加したことがある」との回答の割合が高かった。

「妙円寺詣り」に参加した感想を尋ねたところ、「大変良かった」(66.2%)、「良かった」(33.8%)と、両者を合わせて回答者全員が肯定的な感想を抱いていた。さらに、「妙円寺詣り」参加の意義の自由記述による回答では、「義弘公のことを思いすごさを感じる」「薩摩人としての誇り」「学舎の精神を次世代に伝えること」という感想に表れているように、「妙円寺詣り」の由来を理解し、義弘公をしのび薩摩人としての誇りや学舎の精神を次世代に伝えることに意義を見出している。なお、後述のウォークリー参加者の感想に多く見られたような、途中のおもてなしの良さなどを意義として挙げている回答は皆無であった。

## 2. 「妙円寺詣りウォークリー」参加者へのアンケート調査結果の分析

ここでは、2017年10月22日（日）のウォークリーに参加した方へのアンケート調査結果を分析した。日置市商工会担当者によると、当日は台風の影響で朝から大雨となったため、ウォークリー参加申込者は162名であった。同市商工会青年部のご協力により、第4関所に到達した参加者にアンケート用紙を配布・回収していただき、92名から回答を得た（家族を代表しての回答も含む）。イベントの特質上、参加申込者のうち何名が完歩し第4関所に立ち寄ったかについては、主催者側等でもカウントしていないが、参加申込者の総数からすると、回答者はその56.8%にあたる。ウォークリーには、例年1,000名強の参加者があるとされるが、悪天候のこの年でもこれだけの参加者があったということから、妙円寺詣りが、地域の人々に、行事として根づいていることが窺える。なお、前年の2016年も「あいにくの大雨で小学生の団体は中止となった。それでも大人約三五〇人が鹿児島から伊集院まで歩き通した」という（鹿児島県教育庁文化財課編、2018, p.238）。

### 1) 回答者の属性

回答者の性別では、「女性」(40.4%)、「男性」(59.6%)、年齢は、「60歳代」が31.5%で、「40歳代」(18.5%)、「50歳代」(17.4%)と続く。回答者の住所で最も多いのが鹿児島市(50.6%)、次が日置市(41.4%)で、それ以外の県内は4.6%、県外からは3.4%であった。

イベント開催の情報源としては、「定例行事だから知っていた」が過半数(56.5%)を占めており、回答者の間では、同行事が年中行事として定着していることが窺えた。その次が「知り合い等の紹介」(15.2%)、「自治体のホームページ」(9.8%)、「新聞」「チラシやポスター」(ともに7.6%)であった。

参加の動機は、「健康のため」(32.1%)、「鹿児島の伝統行事を体験するため」(31.3%)、「ほぼ

毎年参加しているから」(26.8%)の順で多かった。「家族や友達にすすめられたから」という理由を挙げた人が、最も少なく、2.7%であった。

回答者の職業・所属は、社会人が大半を占め(64.8%)、次いで「無職」(19.3%)、「高校生」(8.0%)、「小中学生」(3.4%)、「大学生」(2.3%)、その他(3.0%)であった。

### 2) 妙円寺詣りへの参加について

回答者が妙円寺詣りに参加した回数は、「2～5回」が最も多く(28.3%)、次が「ほぼ毎年」(23.9%)であった。その一方で「今回が初めて」と回答した回答者も全体の5分の1強(22.8%)を占めていた。

また、「妙円寺詣りの由来をご存知ですか」という質問に対する回答では、「やや理解している」(45.7%)、「理解している」(42.4%)と、回答者の大半が由来を理解していた。その一方で「理解していない」とする回答はごく少数(3.3%)にとどまった。

妙円寺詣り以外の「鹿児島三大行事」への参加の有無については、まず「曾我どんの傘焼き」については、「一度も参加したことがない」とする回答が最も多く(68.2%)、次いで「そのような行事の存在を知らなかった」(14.1%)、「一度だけ参加したことがある」(11.8%)で、「ほぼ毎年参加している」とする回答は5.9%にとどまった。また、「赤穂義臣伝輪読会」については、「一度も参加したことがない」とする回答が最も多く(63.5%)、次いで「そのような行事の存在を知らなかった」(21.2%)、「一度だけ参加したことがある」(10.6%)であった。「ほぼ毎年参加している」とする回答は4.7%にとどまった。

これらの回答結果より、妙円寺詣り参加者ですら、鹿児島三大行事とされる他の二つの行事については、なじみが少なく、参加した経験があると回答した参加者も少なかった。

さらに、妙円寺詣りに参加した感想については、「良かった」(52.7%)、「大変良かった」(45.6%)

と、両者を合わせて回答者の大半が肯定的な感想を抱いていた。また、妙円寺詣り参加の意義についての自由記述をみると、「島津義弘公のことをしのび健康づくりにも役立っています」「関ヶ原の戦いに思いをと、義弘公の敵中突破に学びたい」という感想に表れているように、妙円寺詣りの由来を理解し、義弘公や関ヶ原の戦いのことをしのぶという伝統行事主催者の意図を理解した感想が、少数であるが見られた。

その他、大半の回答者の感想は、「途中のおもてなしが良かった」「おもてなしが多く鹿児島の人の良さ土地の良さを改めて感じる事ができた」という回答に見られるように、伝統行事の意義というよりは、手厚いおもてなしへの評価や感謝を述べたものが多く見られた。また、「来年も参加したい」という回答も複数見られた。さらに、徳重神社境内で披露される島津鉄砲隊が素晴らしかったとする感想も複数見られた。

### 3. 自由参加者へのアンケート調査結果の分析

前述のように、2017年の妙円寺詣りでは台風が接近していたため、自由参加者については、ウォークリーの前日の10月22日に実施した。自由参加者の多くが徳重神社に到着する時間帯である10時30分頃から約4時間の間に、同神社境内の大型テント内で妙円寺詣りで神社まで歩き休憩している方々にアンケート調査への協力をお願いし、承諾を得た133名に回答していただいた（家族による回答も含む）。

#### 1) 回答者の属性

回答者の性別では、「女性」(57.7%)、「男性」(42.3%)で、年齢は、「60歳代」(21.5%)が最も多かった。「70歳代」(17.7%)、「80歳代」(0.8%)と高齢者も多く、また20歳未満の回答者も、全体の24.6%を占めていた。回答者の住所では、鹿児島市と日置市がともに44.4%で、それ以外の県内8.1%、県外からの参加者も4名(3.2%)であった。

イベント開催の情報源としては、「定例行事だ

から知っていた」が過半数(68.3%)を占めており、回答者の間で同行事が年中行事として定着していることが窺えた。その次が「その他」(17名, 11.7%)で、そのうち10名(全体の6.9%)が、弓道大会など「大会に来るから」という理由を挙げていた。

参加の動機については、「ほぼ毎年参加しているから」(36.5%)が最も多く、次に「鹿児島の伝統行事を体験するため」(25.7%)、「その他」(24名, 16.2%)の順に多かった。

回答者の職業・所属は、「社会人」が43.9%、「無職」(31.7%)、「小中学生」(19.5%)、「高校生」(3.3%)、「その他」は1.6%であった。「大学生」の参加者はいなかった。

#### 2) 「妙円寺詣り」への参加について

回答者が妙円寺詣りに参加した回数は、「ほぼ毎年」「今回が初めて」がともに28.5%で過半数であった。以下「2～5回」(21.5%)、「6～10回」(12.3%)、「11回以上」(8.5%)であった。また、「妙円寺詣りの由来をご存知ですか」という質問に対する回答は、「やや理解している」(40.8%)、「理解している」(36.2%)と、参加者の大半が由来を理解していた。その一方で「理解していない」とする回答はごく少数(6.2%)にとどまった。

次に、妙円寺詣り以外の「鹿児島三大行事」への参加の有無を尋ねたところ、まず、「曾我どんの傘焼き」については、「一度も参加したことがない」とする回答が最も多く(62.1%)、次いで「そのような行事の存在を知らなかった」(25.8%)、「一度だけ参加したことがある」(10.9%)の順であった。「ほぼ毎年参加している」とする回答は3.2%にとどまった。次に、「赤穂義臣伝輪読会」については、「一度も参加したことがない」とする回答が最も多く(55.4%)、次いで「そのような行事の存在を知らなかった」(38.0%)、「一度だけ参加したことがある」(5.0%)の順であった。「ほぼ毎年参加している」とする回答は0.8%にとどまった。これらの回答結果よ



り, ウォークリー参加者と同様に, 鹿児島三大行事とされる他の二つの行事については, なじみが少なく, 参加した経験があると回答した参加者も少ないようであった。

また, 妙円寺詣りに参加した感想については, 「良かった」(53.1%), 「大変良かった」(40.6%) と, 両者を合わせて回答者の大半が肯定的な感想を抱いていた。

さらに, 妙円寺詣りへの参加の意義についての自由記述による回答をみると, ウォークリー参加者にもみられたが, 「義弘公の遺徳を感じる」「関ヶ原の戦いの歴史を学ぶいい機会」という感想に表れているように, 義弘公の遺徳をしのび関ヶ原の戦いの歴史を学ぶという伝統行事主催者の意図を理解した感想が, 少数であるが見られた。その他, 大半の参加者の感想は, 「鹿児島の伝統行事に参加することに意義がある」というように鹿児島の伝統行事に参加することに意義があるとする回答が複数見られ, 「健康維持」や「体力づくり」という回答に見られるように, 健康面で意義があるとする回答も複数見られたことも自由参加者の回答の特徴として指摘できる。また, 「武者行列が素晴らしかった」「来年もまた来たい」という趣旨の回答も複数見られた。

### 3. 武道大会について

本研究では, 剣道競技, 柔道競技, 弓道, 相撲競技の主催者ならびに参加団体指導者に, 妙円寺

詣りや妙円寺詣り関連行事の意義等について, アンケート・インタビュー調査を実施した。調査人数等は表2のとおりである(主催者等20名, 参加団体指導者80名)。それらの調査結果についての分析・考察は, 以下のようにまとめられる(表3参照)。

#### 1) 武道大会主催者へのアンケート・インタビュー調査

妙円寺詣りにどのような立場で関わっているのかについては, 武道大会の役員として関わっている方が90%であり, 来賓として関わっている方が10%であった。また, 武道大会の役員, 来賓として大会に参加している方の80%が, 競技者として妙円寺詣り行事大会の武道大会に参加した経験をもっていた。地域やスポーツ少年団, 道場, 中・高等学校・大学の運動部等の一員として参加し, 「地元の大会であるため, 勝つことにこだわった」「社会人になり久し振りにしたので, 体が痛かった」「子どものときの興奮とか会場の一体感を思い出す」等, 参加した年代によって, 感想は多様であった。回答者の中には, 奉納行事, 武者行列に参加する方も見られ, インタビュー調査による聞き取りでは, 「お詣り」をするとの回答が100%であった。

妙円寺詣りおよび関連行事については, 大会主催者の85%が参加経験をもっていた。そのうちの94.1%は2, 3回であるが, 回答者の中には, 40

表2 武道大会参加者へのアンケート・インタビュー調査人数等

競技	実施年等	参加団体数(団体)	アンケート・インタビュー調査人数(人)
剣道	2017年 第67回大会	少年56, 中学校男子33, 中学校女子28, 高等学校男子36, 高等学校女子21, 職域40, 計214	主催者等1, 参加団体指導者35, 計36
柔道	2018年 第68回大会	少年12, 中学校男子14, 中学校女子12, 高等学校男子8, 職域6, 計52	主催者等15, 参加団体指導者29, 計44
弓道	2019年 第69回大会	中学校男子21, 中学校女子21, 高等学校男子16, 高等学校女子12, 一般29, 計99	主催者等2, 参加団体指導者4, 計6
相撲	2019年 第69回大会	小学校男子17, 小学校女子10, 高等学校男子1, 一般2, 計30	主催者等2, 参加団体指導者12, 計14

※ 剣道については, 日置市と文化交流友好協力関係協約を結ぶ韓国南原市より, 少年団, 中学校男子, 一般の各カテゴリーでの計4チームの参加を含む。

表3 武道大会参加者へのアンケート・インタビュー調査結果

武道大会主催者				
項目	剣道	柔道	相撲	弓道
競技者として武道大会への参加時の感想	・「地元の大会であるため、勝つことにこだわった」	・「社会人になり久し振りにしたので、体が痛かった」	・「子どもときの興奮とか会場の一体感を思い出す」	(回答無し)
妙円寺詣りへの参加時の感想	・「息子と歩き、先人の偉大さを感じた」	・「伝統ある行事に参加できたという喜び」 ・「健康に良いと思った」 ・「完歩直後の達成感が気持ち良かった」 ・「大会関係で歩くことがなかった」	・「昔は地域のみinnで歩き、仲間意識も高まった」	・「体力づくりやリーダーシップの育成につながると思う」
妙円寺詣りおよび関連行事の開催の意義	・「苦難に立ち向かう大切さを知る事ができる」	・「先人の歴史を学ぶ」 ・「伝統ある行事に参加して誇りと勇気を学ばせたい」 ・「鹿児島島の気風を身につける」 ・「苦を偲び、青少年の健全育成に役立つ」	・「子どもたちに与える影響は大きい」	・「いろいろな取り組みを知り、郷土の良さに触れられる」
武道大会参加団体指導者				
項目	剣道	柔道	相撲	弓道
妙円寺詣りの由来や行事の意義を所属者たちに説明しない理由	(回答無し)	・「部活動の大会のひとつとしてしか扱っていないため、また、そのような時間もないため」(中学校)	(回答無し)	(回答無し)
武道大会参加に当たった課題	・「試合には出たいけど、保護者の負担が大きい」(中学校)	・「スポーツ庁による部活動への提言もあり、大会精選に入るため、市外の大会の出場について困っている」(中学校)	・「練習機会の確保が難しくなってきた」(小学校)	・「参加者が多く、場所取り等はないへん」(中学校)
武道大会に参加した感想	・「鹿児島島の歴史を身近に感じる良い機会だと思います」(中学校) ・「伝統ある行事であり、誇りに思う」(高校) ・「地域、県外との交流もあるため良い」(中学校) ・「韓国の剣道も初めて近くで見られました。審判もできて大変勉強になりました」(中学校) ・「小・中・高・一般が一堂に会しての取組が素晴らしいと思う(交流の意味で)」(中学校) ・「大学生として出られる試合は少ないので、このような職域団体の試合があるとありがたい」(大学)	・「熱気ある大会で日置市の方々のサポートも素晴らしい」(中学校)	・「大舞台(大勢の人前)で相撲を取る経験をさせられる素晴らしい大会」(小学校) ・「子供の頃からずっとこの行事に関わっている地域の方でいて、尊敬、感謝している」(小学校)	・「境内で試合をするという貴重な経験をさせていただける」(中学校) ・「いろいろな方の試技がみられるよい機会」(中学校)
武道大会参加者の減少を危惧していること	(回答無し)	・「参加者が少なくなってきたと思う」(小学校) ・「(前略)だんだんと参加者数にかけりがある様に思われ、武道を学ぶ子供達が減り今後を心配している」(中学校)	・「自分のときと比べると、参加者は減っている。指導者とか関わる大人自体が減っている」(小学校)	(回答無し)

※ 本文に引用したのみ掲載。

回参加とライフワークの一環としている方も見られる。参加時の感想は多様であるものの、「伝統ある行事に参加できたという喜び」「息子と歩き、先人の偉大さを感じた」「健康に良いと思った」「完歩直後の達成感が気持ち良かった」「昔は地域のみinnで歩き、仲間意識も高まった」「体力づくりやリーダーシップの育成につながると思う」等、妙円寺詣り行事大会の趣旨に合致していることが考察できる。一方で、「大会関係で歩くこと

がなかった」という回答もあったことから、武道大会参加によって参画機会を失うことも考えられる。

妙円寺詣りおよび関連行事の開催の意義について得られた回答を分類すると、「先人の歴史を学ぶ」「伝統ある行事に参加して誇りと勇気を学ばせたい」「鹿児島島の気風を身につける」「苦を偲び、青少年の健全育成に役立つ」「苦難に立ち向かう大切さを知る事ができる」「子どもたちに与える

影響は大きい」「いろいろな取り組みを知り、郷土の良さに触れられる」等、歴史と伝統に触れること、鹿児島の良いことに触れること、青少年の健全育成の3点に意義を見出し、継続することを望む声が多いという結果が得られた。また、行事継承のための財政援助、PRの必要性を訴えたり、競技人口の減少を危惧したりしている声もあった。

## 2) 武道大会参加団体指導者へのアンケート・インタビュー調査

武道大会参加団体については、「小学生」37.5%、「中学生」40%、「高校生」16.25%、「大学生」5%、「一般」1.25%で、団員数は若干名から70名まで多岐にわたっていた。

武道大会への参加回数については、「初めて」2.5%、「2～5回」10%、「6～10回」25%、「11回以上」58.75%、「不明」3.75%であった。「初めて」と回答した方は、中学校に新たに赴任した部活動顧問であること、参加回数が多い方はスポーツ少年団指導者あるいは、中・高の部活動顧問を長くしている方であった。

参加団体指導者自身が、妙円寺詣りの由来や行事の意義を所属者たちに説明したかについては、「説明した」と回答した指導者は26.25%であり、所属者の年齢が高いほど説明をしている割合が低かった。妙円寺詣りの由来の理解度が高いこと、開会式等で必ず説明されること等が、実施率の低さにつながっていると考えられる。参加団体指導者自身が説明しない理由として、「部活動の大会のひとつとしてしか扱っていないため。また、そのような時間もないため」というような回答もあった。

本大会に参加することについては、「有意義である」90%、「わからない」8.75%、「その他」1.25%との回答を得た。本大会への参加に意義を感じている参加団体指導者が多いことがわかる。妙円寺詣りの由来を知っているかについては、「理解している」60%、「やや理解している」31.25%、「どちらでもない」2.5%、「理解してい

ない」6.25%であった。インタビューした方で日置市在住者は全員「理解している」と回答したことから、地域民にとっては、知っていることが当たり前という状況であることが窺える。

武道大会に参加した感想については、「大変良かった」66.25%、「良かった」26.25%、「どちらでもない」7.5%であり、「良くなかった」、「まったく良くなかった」との回答は0%であった。参加団体指導者の多くが肯定的に捉えているといえる。良かった理由として、試合経験を積める、歴史に触れられる、よい刺激を受けるといった旨の回答を得た。

一方で、「試合には出たいけど、保護者の負担が大きい」「スポーツ庁による部活動への提言もあり、大会精選に入るため、市外の大会の出場について困っている」「練習機会の確保が難しくなってきた」「参加者が多く、場所取り等はたいへん」等の課題を抱えている旨の回答も得た。

武道大会に参加した感想については、「鹿児島の歴史を身近に感じる良い機会だと思います」「伝統ある行事であり、誇りに思う」「地域、県外との交流もあるため良い」「韓国の剣道も初めて近くで見られました。審判もできて大変勉強になりました」「大舞台（大勢の人前）で相撲を取る経験をさせられるすばらしい大会」「小・中・高・一般が一堂に会しての取組が素晴らしいと思う（交流の意味で）」「熱気ある大会で日置市の方々のサポートも素晴らしい」「子供の頃からずっとこの行事に関わっている地域の方がいて、尊敬、感謝している」「大学生として出られる試合は少ないので、このような職域団体の試合があるとありがたい」「境内で試合をするという貴重な経験をさせていただける」「いろいろな方の試技がみられるよい機会」等の声があった。一方で、「参加者が少なくなってきたと思う」「（前略）だんだんと参加者数にかげりがある様に思われ、武道を学ぶ子供達が減り今後を心配している」「自分のときと比べると、参加者は減っている。指導者とか関わる大人自体が減っている」といった参加者

の減少を危惧する回答も得た。

## V まとめと考察

以上、本研究では、「妙円寺詣り」の実態を通して、地域の伝統的運動文化に由来する行事の現代的意義と継承の課題について考察を行った。その結果は、次のようにまとめられる。

まず、学舎連合会による武者行列参加者、武道大会参加者、ウォークリーおよび自由参加者へのアンケート調査から、大半が参加したことを肯定的に評価している。しかしながら、その肯定的評価の理由や「妙円寺詣り」参加の意義は、参加している立場によって異なっていることが指摘できる。具体的には、ウォークリーおよび自由参加者の中には、おもてなしが良かったとする感想が散見されたが、学舎連合会による武者行列参加者の感想にはそのような感想は見られず、郷中教育以来の伝統的な精神を次世代に繋ぐというような点に参加の意義を見出していることが窺えた。それらの結果から、薩摩藩の伝統を受け継いだ学舎連合会の武者行列参加者とそれ以外の一般の妙円寺詣り参加者というように、参加者の立場の違いによって、妙円寺詣りに対する意識や参加することの意味が異なる傾向にあるといえる。

しかしながら、本稿においてみてきたように、妙円寺詣りの自由参加者、ウォークリー参加者の感想のなかには、義弘公の遺徳をしのび関ヶ原の戦いの歴史を学ぶという、この伝統行事主催者の意図を理解した回答も、少数ではあるが見られた。そのようなことから、歴史的事実に由来する妙円寺詣りは、地域の伝統の継承と市民の地域行事への参加ということが両立しているイベントとして、固有の特徴を有しているといえる。また、鹿児島市内からの行程において、中間地点のチェスト館から徳重神社のある伊集院に至るまでの道沿いに、関ヶ原の合戦に参加した武将の幟旗がところどころに立てられ、徳重神社境内でも、社殿に至る参拝道の両脇に関ヶ原の合戦に参加した武将の幟旗が立てられるなど、妙円寺詣りは、参加

者にとって、改めて往事に想いを馳せる場になっていると思われる。

武道大会については、行事そのものの歴史や伝統、意義、他者と交流できること等を肯定的に捉えており、武道大会の在り方や試合経験ができることの魅力や地域の方々のサポートへの強い感謝の思いとともに、行事の存続を望んでいる意見や、存続を危惧する声もあった。しかしながら、武道大会への参加者のなかには、「妙円寺詣りに参加する」という意識ではなく、部活動の一環としての活動に参加しているという感想も見られたことから、部活動の延長線上にある大会、というイメージをもたれていることも否定できない。この点も、妙円寺詣りの関連行事としての武道大会の今後の在り方を考えるうえでの課題といえる。

妙円寺詣り以外の鹿児島三大行事とされる他の二つの行事については、学舎連合会の武者行列参加者では、参加した経験があるとする回答の割合が高かった。今後、それら二つの行事を含め、鹿児島の伝統行事の継承に、学舎の次代を担う子供たちをどのようにして促していくか、という課題にも取り組む必要があると考える。

さらに、全体的にみて、伝統行事の継承・発展という観点から、今後若い世代の参加者をいかに増やしていくかが課題として挙げられる。

すでに述べたように、台風による大雨という悪天候の年でも参加者たちが歩き通したということからも、「妙円寺詣り」が、地域に欠かせない行事として定着しているとみることができる。そして、本稿の体験録にもみられるように、「妙円寺詣り」は、今日においても鹿児島の学舎の活動や学校教育での体験学習に組み込まれ、薩摩藩の郷中教育で行われた伝統的運動文化を継承するものとして行われている。そして、そのことが鹿児島に生きる人々の人間形成や精神面・身体面での鍛錬にも繋がっており、鹿児島という風土と結びついた伝統行事として、地域の活性化という面でも有形・無形の効果を生み出していると考えられる。

## 謝辞

本研究を進めるに際し、現地調査およびアンケート・インタビュー調査にご協力賜りました日置市商工会、同商工会青年部、武道大会（行事大会）の主催者・参加団体、鹿児島市学舎連合会（武者行列）の関係者各位、ウォークリー参加者・自由参加者の方々には、特に記して謝意を表します。

## 付記

本研究は、鹿屋体育大学平成29年度重点プロジェクト事業経費（CASEプロジェクト研究経費）等による研究成果の一部である。

## 注

注1）これらの行事については、たとえば、原口（1973）、原口（1984）では、郷中教育からの伝統行事とされているが、その論拠となる史料については言及していない。また、これらの行事に関して、「いずれも武士層の間で受け継がれたもので、武士精神の高揚をはかったものであったことは明らかであるが、それらが現在市民化した行事になっているところに、現代的市民意識の一端が読みとれよう。」（中村、1998, pp. 20-21）という考察もみられる。

鹿児島県教育委員会編集の教育史（鹿児島県教育委員会編、1961；1963）も、これらを郷中の三大行事として挙げており、学舎の教育にも継承されたと述べている（鹿児島県教育委員会編、1961）。また、それぞれの由来や歴史については、「この三大行事の起源がいつごろであるかはわからないが、大久保利通の日記や『樺山資紀伯懐旧談』には見えているから、おそくとも幕末にはすでに三大行事が確立していたことは断定できよう。」（鹿児島県教育委員会編、1963, p. 95）と述べて、当日の流れを紹介している（同, pp.95-97）。しかしながら、「大久保日記や樺山伯の懐旧談では曾我物語を読むだけで傘焼きのことには触れていない。それで傘焼

き行事は明治以後の学舎になってから始まったのではないかと思う。」（同, p. 96）とも述べている。

北川著・鹿児島県立図書館編の文献（1972）も、郷中教育における二才の主要行事として「曾我物語輪読会（曾我の傘焼）」を挙げるなかで、「薩摩藩内にあつて、藩政時代に、曾我兄弟を追悼する目的で、勇壮な傘焼の行事を行なったと言う史料を未だ発見しない」とする（pp. 148-149）。また、『鹿児島県の祭り・行事：かごしまの祭り・行事調査事業報告書』（鹿児島県教育庁文化財課編、2018）も、「曾我どん傘焼き」については、「明治以降の学舎になってからの行事と思われる。もとは曾我兄弟の御霊を慰め、水神を祀る火祭りであったものを郷中教育として取り上げたものであろう。」（巻末, p. 3）と報告している。

しかしながら、史料調査の結果、これらを郷中時代からの伝統行事とする史料として、慶城学舎出身東京帝国大学学生会編『学舎之研究』（1915, p. 116）、鹿児島縣『学舎之葉』（1925, p. 25）が得られた。また、公刊されている『大久保利通日記』（鹿児島県歴史史料センター黎明館編、1988）を検討した結果、『曾我物語』が読まれていたことについての日記（p. 20）は得られたが、管見の限りにおいて、傘焼きについての記述はみられなかった。これらの史料の詳細については、後述するように稿を改めて述べることにする。

以上のように、郷中教育において傘焼きが行われていたか否かについては、先行研究・文献の間で見解が分かれるところであり、行われていたとする場合でも、その論拠となる史料について言及していないものもある。しかしながら、前述のように、郷中時代から傘焼きが行われていたという、大正期の史料もみられた。

本稿では、以上のようにまとめるにとどめ、今後も継続して郷中教育、学舎の教育における活動や行事について史料の調査・収集を進め、

前述の『大久保利通日記』なども含め、「曾我どんの傘焼き」研究として、別稿において明らかにしたいと考えている。

なお、文献からの引用文の句読点、漢字・仮名の表記については、原文のままとした。以下、引用文については同様とする。

注2) 鶴木 (2017) においても、「妙円寺詣り」の体験が簡述されている。

注3) 単純集計であることから、紙幅の関係上、分析結果のグラフは省略した。

## 文献

- 安藤保 (1992) 郷中教育の完成 (上). 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編, 44: 1-17.
- 安藤保 (1993) 郷中教育の完成 (中). 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文社会科学編, 45: 51-67.
- 麿城學舎出身東京帝國大學學生會編 (1915) 學舎之研究. 麿城學舎出身東京帝國大學學生會.
- 原口泉 (1984) 薩摩の郷中教育と武道 (特別講演). 日本体育学会大会号, 35: 3.
- 原口泉監 (2007) 目で見る日置・いちき串木野の100年. 郷土出版社.
- 原口虎雄 (1973) 鹿児島県の歴史 (県史シリーズ46). 山川出版社, pp.139-141.
- 日置市 (online 1) 観光: 遊ぶ・体験する: 祭りイベントカレンダー: 10月: 妙円寺詣り. 「妙円寺詣りの由来」. [https://www.city.hioki.kagoshima.jp/kanko/kankou/asobu/event-calendar/oct/documents/myoenjimairi\\_yurai.pdf](https://www.city.hioki.kagoshima.jp/kanko/kankou/asobu/event-calendar/oct/documents/myoenjimairi_yurai.pdf)
- 日置市 (online 2) 市民の暮らし: 子育て・教育: スポーツ: 妙円寺詣り行事大会. 「第69回妙円寺詣り行事大会『大会要項』」. <https://www.city.hioki.kagoshima.jp/sposhin/kurashi/kosodatekyoiku/shakaitaiku/documents/69jissiyoukou.pdf>
- 日置市教育委員会 (2010) 戦国島津はじまりとむすびの地, 日置市. 日置市教育委員会.
- 伊集院町誌編さん委員会編 (2002) 伊集院町誌. 伊集院町.
- 鹿児島県 (1925) 學舎之栞. 鹿児島縣.
- 鹿児島県教育委員会編 (1961) 鹿児島県教育史 下巻. 鹿児島県立教育研究所, p. 327.
- 鹿児島県教育委員会編 (1963) 鹿児島県教育史—明治以前—. 鹿児島県立教育研究所, pp. 93-97.
- 鹿児島県教育庁文化財課編 (2018) 鹿児島県の祭り・行事: かがしまの祭り・行事調査事業報告書. 鹿児島県教育委員会.
- 鹿児島県歴史史料センター黎明館編 (1988) 鹿児島県史料 大久保利通史料 一. 鹿児島県.
- 北川鉄三著・鹿児島県立図書館編 (1972) 薩摩の郷中教育. 鹿児島県立図書館.
- 松本彦三郎 (1944) 郷中級育の研究. 八雲書店.
- 三木靖編 (1986) 島津義弘のすべて. 新人物往来社.
- 長岡良治, 奥保宏他 (2003) 鹿児島県下教育委員会の生涯スポーツ事業: 現状と課題. 鹿児島大学教育学部研究紀要. 人文・社会科学編, 54: 111-127.
- 中村明蔵 (1998) 鹿児島県 (本土) 住民の思考・行動形態—その歴史的背景をさぐる—. 季刊社会学部論集, 17(3): 2-26.
- 西田実 (1972) チェスト関ヶ原—島津義弘と薩摩精神—. 春苑堂書店.
- 鶴木親志 (online) 平成29年度の研究内容とその成果. 『スポーツを科学する 平成29年度版』 (鹿屋体育大学) 所収. <https://www.nifs-k.ac.jp/images/files/property/supokagaku29.pdf>
- 山田理恵 (2015) 地域開発からみた伝統的運動文化の意義: 桑名の打毬戯の展開と現代における価値考察. 体育学研究, 60(2): 415-428.
- 山田理恵, 森規昭 (2017) 伝統綱引きの現代性: 鳥取市気高町水尻における「因幡の菖蒲綱引き」に着目して. 体育学研究, 62(1): 83-104.